

代々の面影
第1集
三樹一平作

088129-000-1

76-40

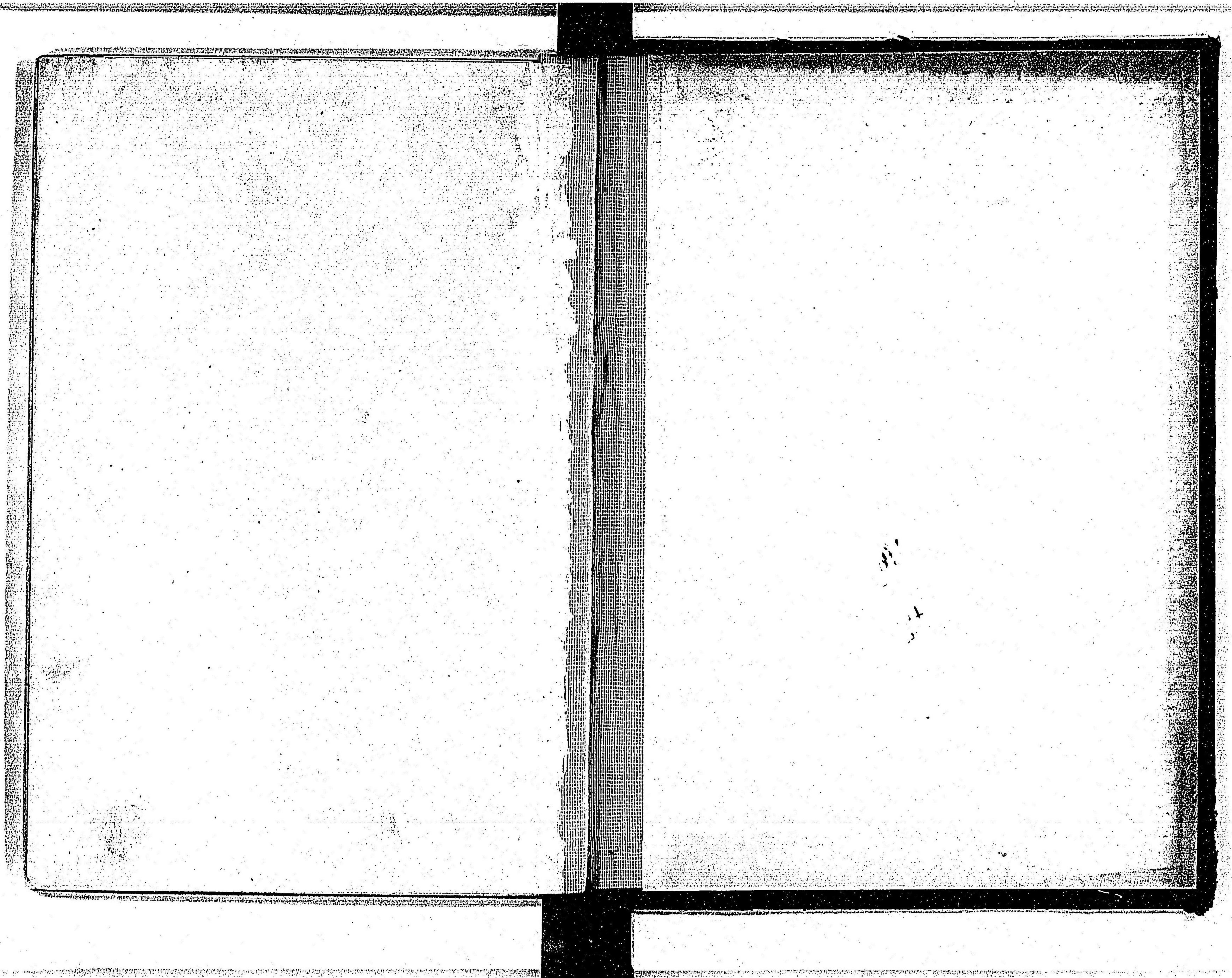
代々の面影 第1集

三樹 一平/編

M30

DBG-0227





76-40

岑名氏作



代乃面影 第一集

东原 昭信堂院

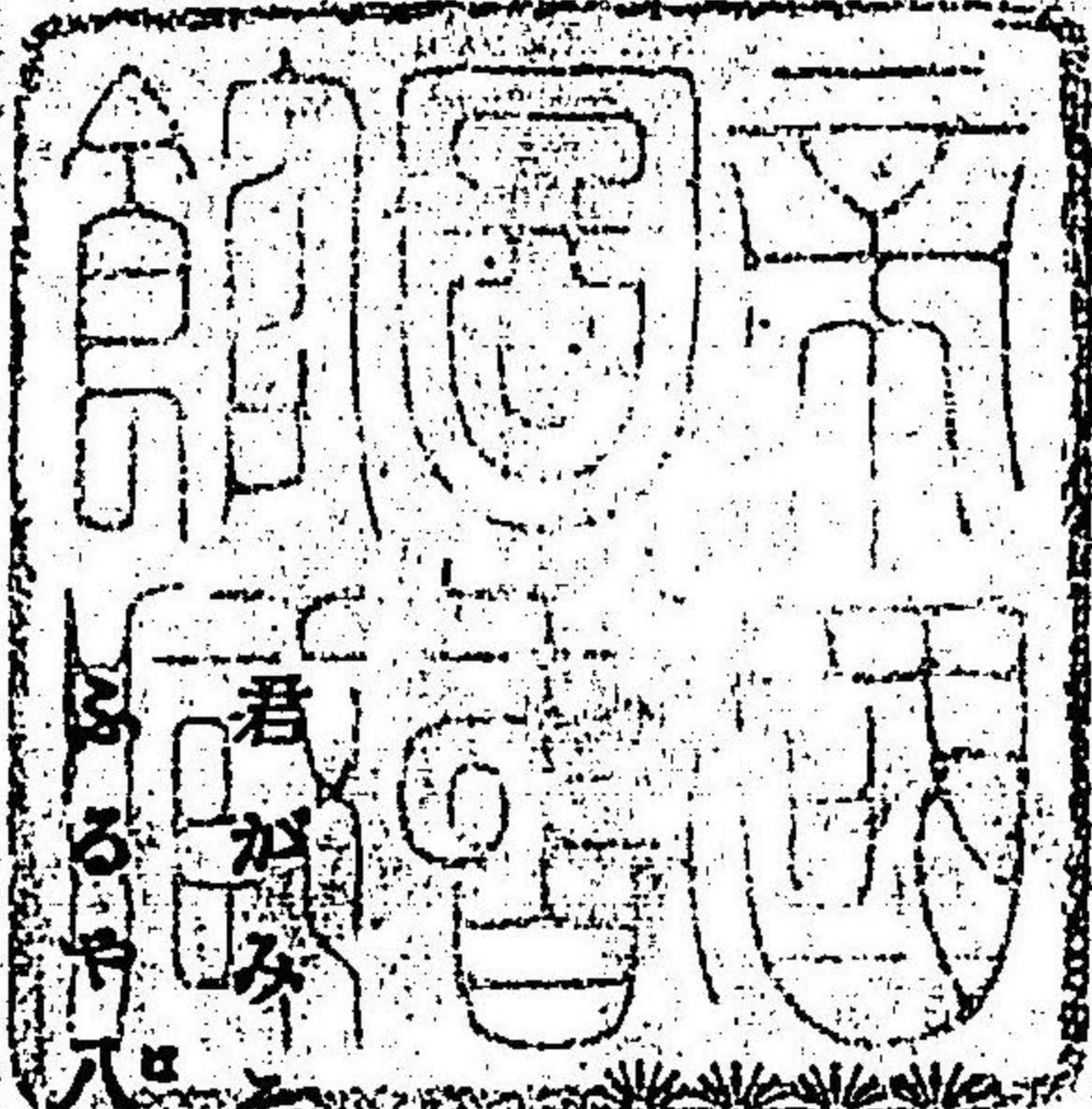


代々の面影 第一集

無名氏作

嗟峨の月

(小督局)



君がみそでは雲なれや
さるや八月のなかばにて
くもりがちなる月かげの
いどいおはれのまどり草

たえず涙の雨とのみ
さしも隈なき天なれど
さらにおぼろに見えければ
葉末にさけるつゆの間も

忘るゝよしのなみだ川
召させ給ひて今宵しも
小督を尋ねまゐれどの
きいて馴にしつゝま琴の
君がめぐみは久かたの
やがて出るや秋の夜の

沈むちもひに仲國を
嵯峨のあたりわがちもふ
仰がじこみさきつころ
じらべをさらばたよりにて
月毛の駒に鞭をあげ
いそぐ心の旅路かな。

よは難波渦よしあしの
なれにし軒のしのお草
大内山のやまさくら
心のにこる清盛の
さかのゝ奥にほいなくも

ちぎり短かきならひかや
しのおにも尙あまひある
九重ふかく匂ひしを
いかりにふれてをしかなく
思ひ入る身のかくれ家に

松の嵐はあらくとも
月日かさなる柴垣の
君がたみとつとみてし
さでくゝさらば音になてし
聲とくめけり秋の夜の

うきよの夢のさめされは
しばしやうさを忘らんを
袂の露のたまたま琴を
しのお思をかきなせば
長き恨みのきりうへす。

「峰の嵐か松かせか
駒をひかへて聞くほどに
あはれむかしをしのお摺
あなからたすめる月にこそ
さかちかき根に駒つなき
この戸あけさせ給ふよと

尋ねる人の琴の音が
つま音しるき想夫戀
みだるゝ思ひはらさんど
かきなすさとのねにあらぬ
柴の折戸に身をよせて
よへば内より押しひらく

扉をばやくあし入りて
宮の使となるみがた
こもるみかどの仰言
かたる言葉のすゑに

仲國こゝにもしきの
深き情のかすゝも
傳へんためにまゐりぬと
めぐみの露をやとしけん。

夢かうつゝかうつゝとも
かゝるいやしき賤が家に
賜はることばあらし玉の
あらざらましをまそ鏡
思ひみだれてあさま山
見やはどがめぬ仲國は
月のむしろのどりくは

夢とも見えぬ世なるかな
何のみかどのあほせごと
年はもゝたびかへるとも
かけても知れやあん方と
けぶりのたつをつゝめども
むかし雲井の宮のうち
召し出されてかしくくる

笛をふきてし人なれば
しのばるゝとももれ出る
しらべはかくれなきものを

いかに人目をしのぶぐさ
袖のなみだの玉ごとの
かくしたまふぞ恨めしき。

別れ給ひしその後には
君がみ袖は朝夕に
妻こひかぬるをしかの
嵯峨野のそらを見るめかる
よるべなきさの捨小舟
かすぞつきせぬ戀なれば
やつれ給ひてうつせみの
心なやますたねなれや

草のいほりにあられども
露のやどりをなすの原
なく音ぞいとあはれなる
あまの衣の乾くまも
明日のいのちをしらなみの
いともたふときあんすがた
世をあきの夜の月影も
仲國を召しみづぐきの

跡もたへなるおんふみを
尋ねてこゝに來て見れば

ゆるさせ給へ仲國よ
忍びてかよふ道あらば
露とけたじと思へるを
ゆるされざれば逢ふこと
あだに月日をすがの根の
くがに迷へることちして
あはれとおぼし玉はりて
ふかきなさけの玉章を
たよりを今ぞきくの花

傳へまゐれのちん言に
情をしらぬ女郎花。

今はなにをかしのふ山
君がめぐみをあたし野の
みるめの關のしかすがに
猶かたいとのくるしくて
長きうきめを見つ鳥の
たつきもしらぬ身の程を
かたじけなくも水ぐさの
かけてぞ來ぬるかりがぬの
霜にしをるゝすがたさへ

今宵ばかりは咲かへり

うれしく見ゆる夜半の月、

おなじ木蔭の雨やどり
他生の縁ときくものを
一よのみかはいく月日
さらぬ別離わかのなかりせば
げに世の中は明日香川
うつればかはるならひにて
春のみそのに大君と
今はうき世のさかの天
ぬるゝかほなる衣手の
忍ぶもじずり君ゆゑに

ひとつ小川の水くむも
難波のおしのうきふしも
重ねし契なるからに
千代も八千代もそはまじを
昨日の淵は今日の瀬と
むかじはともにも九重の
花の色こそながめしか
ひとりながむる月影も
あもひは胸にみちのくの
みだれそめにし琴のいと、

花の都をいでしより
未のどまりのさかの里
やどりのかきもかさなりて
山のは出る月影に
かきなす翠のはしなくも
たよりとなりてこよひしも
思ひは胸にみつれども
あぼつかなくもかへりぶみ
駒にうちのをる仲國が
名殘惜しくもあり明の

身ぞうき舟の荷をちもみ
夕ゆふへや朝ごとの
人をまつ虫なくなべに
日頃のうさをはらさんと
君がたふときちんぶみの
ふかきなさをみてければ
筆のはてびはしかすがに
みかどに傳へ給はれと
かへるすがたのあそを見て
影こそくもれさかの月。

露の玉

(成親卿)

うき世の波に袖ぬれて
身となりける悲しさに
見れども人のひとりだに
如何に罪科重くとも
げに世はすえと成親の
なみだ流さぬものぞなき
引かるしましに旅ごころも
鳥羽の御殿をよそに見て

おはれ都を追はる可き
御車まもるものゝぶを
知るもの絶えてなかりしに
なさをしらぬしわざかな
卿はなげかせ給へれば
明日はいつことをしらま弓
うら悲しくもなづかしき
いぬることろぞ哀れなる。

泪の淵に世の中の
命を今は惜まねど
一目たりとも逢はば
心のうちを亂れつゝ
我方さまのものあると
云ふものたゞてめらされば
昨日と變はる習ひかと
鏡の袖をしぼりけり

あはれ身に添ふひとは誰ぞ
屋形船にぞ乗せらるゝ
いまは何をか人のよに

かゝるうき目をみやこなる
我のみひとが梓ゆみ
行くもすぐせの報かど
空も露けき心地して
漕ぎ出でしかば夕ぐれに

未はくだくる玉の緒よ
又もなげきのまさり草
都に近きあたりにて
こゝろのまゝにならの葉の
着きてし見ればこゝも亦
死ぬ日を尙も長松の

十

うきたび毎に投げる身の
日頃なれにし妻と子に
いはでしのぶのすり衣
云ひ遺すへきことあれば
尋ね探せと我こそと
ひとの情は明日香川
成親卿は泣きければ
猛きにはやるつはものも。

盡きせぬ涙ばかりなり
身となりぬるも時なれば
たのむのかりのつれなくて

妻に別れつ子を捨てつ
ひいてかゝらぬ異ぐに
思へば晴るゝ水無月の
故郷遠く波路分け
大物浦に立つきにけり。

たえなば絶えぬながらへば
葉ずるの露のおなじくば
消え失ぬべく願へとも
風をたよりに此うらに
骨埋むべき地ならで
みどり兒島に流さるゝ

十一

身となりしゆを明くる朝
あとの白なみ立田やま

船押し出し漕ぎ行けば
夜半にいかなる夢を見し。

十二

うき世をうみの旅ごらも
ひなの見島につきぬれば
いとあさましき庵にぞ
さらにつれなく思はれて
都の方をうちながめ
くもらぬ空にしぼるなり
前には海をいだきつゝ
峯の松風浪の音を

ひも重りてあまさがる
これこそ卿の住家とて
入れられたりし其のちは
柴の折戸のあけぐれに
ころもの袖をさゝかたの
あはれむかしのまゝならば
うしろに山を負ひたれば
琴のしらべと聞かましを。

其行未はうるはしき
成経さへも外つ國に
壁生草のいつまでも
つらさ忘るゝすべなしと
思ひたちにし墨ぞめの
さりどてうらみつき弓の
雲みること成親は
子のくるしみはいかならん
賤の庵のいぶせきに
物がたりせよ汝もうき
なげきにまづむ折からや

花や咲かんとまでし子の
流されけりと聞くからに
かくてしわらばなかくに
「世のうき事もまられじと
袖」にぞやつれ玉ひける
はるゝひまなき遠やまの
むねの鏡に向ふなり
妻のゆくへはいづくぞと。
降りくる雨の窓打てば
この世を思ふ泪かど
今みやこより信俊は

十三

卿をたづねて参りぬと
夢か現かゆめならば
出る姿を見まつれば
めりくれ思ひも消えはてし
すゑの松山こそ波に

告るをきいてこそはにかに
夢の中に逢ひてんを
かはれるさまに信としは
袖の涙をまばればや
猶もこそたるけしき哉。

哀とも見ま今こゝに
北の方より傳へよと
語りしあとは海あれて
まばし涙にくれなるの
聲たそくはいたまじや
幸なきものはなもあらし

きみを尋ねて信俊は
受けし仰を残りなく
波の音のみ聞ゆなり、
袖しほりつゝ信俊は
北の方ほど世の中に
きみに別れし其日より

つき添ふものに捨られし
肌につけたる玉章を

のちのなげきはかくこそと
成親卿にわたしけり。

つらき思ひをする墨の
かき亂れたる水莖の
君にわかれて逢坂の
ひなに月日をあかし瀧
なからふことのものうきに
幼きも父を戀ひ
われも黒髪かきぬらし
はかなきさまを見られよと

薄きは落るなみだ川
跡はさやがに見えぬを
關をばよそに住みなれぬ
沖の釣舟かゝりなくて
いと昔のきよのばれて
かなしみなくを聞くなげに
思ひみたるゝ筆のあと
讀まれけるこそかなしけれ。

あはれ此世になきものと
吊へよとぞ木綿花の
又あふことをかたみとて
返へす御文の奥に入れ
なみだながらに信俊は
名惜残めどいとま乞ひ
八月も半三経れば
月を宿せし露の玉

知りたらん日に我あを
やがて散らんと覺ゆれば
髪の一ふさきりはなち
そを傳へよと賜はれば
またこそまゐり申さめと
ふる郷さして歸りけり、
滿れば欠くる十六夜の
うらみ有木に散り果てぬ。



浪の音

(俊寛有)

そむき果てたる世の中を
くやししく思ひあさなけに
まげき所を千早ぶる
康頼とのみゆるさるゝ
住めるは人か鬼か鳥
つらきあきふし共にせし
召し還されて都路へ
残るべしとは思ひまや

とく捨てざりしとのみそ
熊野詣をなしければ
神やうけけん成経と
身とこそ今はなりにけれ、
荒れたる草のかりほにぞ
三たりの友の二人のみ
のぼれるあとに只ひとり
今日か明日かとあけぐれに

俊寛僧都が歸るべき
 千あきの思ひ有王の
 ゆるされかへる人どもの
 聞いてうれしさとふべき
 歸るを迎へまつらむと
 待ちにし人の來まされば
 あやしみとふにそれは猶
 島にすてられ残るぞと
 同じ科にて流されし
 きみのみ獨り捨小舟
 よるべなき身となれるぞと

日を待ちしかばひとくきも
 心の中ぞいかならん。
 都に入るは今日なりと
 ものなきほどに勇みつい
 鳥羽にいゆきて見ければ
 何かゆることあるらめと
 犯志し罪の重ければ
 告られしこそ悲しけれ
 かたぐのうちのいかなれば
 漕がんとすれど掛をたえ
 なげきに沈む有王は

俊寛僧都と聲たて、

あぼつかなくも呼ぶ小鳥。

罪免されてかへるべき
 僧都の姫御を音なひて
 召し使はれて父きみに
 かゝるうき世にのぞむべき
 青海原を漕ぎわけて
 薩摩島なる彼の島へ
 尋ね見ばやと思ふなり
 うつゝに逢はかたけれど
 跡もやとしきあんなを
 なのみならず喜ばれ

日やあらんとも覺えねば
 此有王はわかきより
 深きゆぐみを受けし身の
 ものどて外にあら浪の
 つれなく残り給ふてふ
 いかで渡りてらん行方
 千里のそらを隔つれば
 胸のかゝみに見づくきの
 賜はれかして歸りしに
 かきたうてけり鳥のあと。

子ゆゑに生けるたらちねの
ゆるすまじとや思ひけん
うらかなしくも只ひとり
出ればあどはまら雲の
ひもかさなりてのどかなる
ほどふる長き船路をば
幼き折は名をきいて
今ぞうつゝにみへの帯
まきのをちこちさまよへば
我いふことをきくわくる

俊寛僧都のちん行へ

親に告げなば中々に
みそかにたつや旅ごろも
彌生の末にふるさとを
そらのみ見えて波まくら
春とゆきかふ夏も亦
しのぎつやがて着にけり
恐れたりける鬼が鳥
めぐり逢ふことあらばやと
田畑も村も里もなく
人もなきこそかなしけれ。
知らば語りてきかせよと

逢ふ人毎に尋ねれど
ひとりの翁こゝろをて
過にし年にながれ木と
こゝに住みしが去歳の秋
上りし人はふたりにて
日々にうきめをみやこ鳥
かなたこなたをさまよひて
今ぞゆくへはしら浪の
まるよしさらにあらずとぞ
ながき波路をしのぎつゝ
尋ねる人に逢ひかねて

答ふる人のなかりしに
それかわらぬか知らねども
おぼしきひとはみたり来て
召しかへされて都路へ
あとに残るはたいひとり
つれなき島になき迷ひ
ありきしさまの見えげれど
海のもくつとなりけけん
つばらに語りきかせける。
こゝに來し身のいたづらに
歸らばいかにうつせみの

まのひとくりにそしられん
難くばせめてなきからの
あどを吊ひまつらんと
たなびく峯をよち上り
奥山ふかく分け入れば
陥み進むべきよしもなく
衣かたしきたび寐せば
結ぶ夢さつさまされて
めぐりも逢はぬ悲しさに
しまのうらわを尋ねれど
沖の白洲になく千鳥

おはれうつしに逢ふことの
一片たりとももとめ得て
行方いつこか志ら雲の
谷にくたりて澤を越え
人のゆきかふ道たえて
つかるゝまゝに草まくら
晴れたるそらの夜嵐に
見る面影もなかりけり。
せんすべをなみうちよする
磯のまつかぜ浪のちと
かもめのほかに跡をとぶ

ものゝなきこそあはれなれ
あぐつあぐつの衣身にまどひ
やせ衰へて鬼かども
ものゝ來ぬるに逢ひければ
若しや行へを知りたると
島のうちにやましますと
とほるゝ人は忘れぬば
消え入る僧都を膝にのせ
かなしやきみのちんゆくへ
はるゝ波路を漕ぎ分けて
かひこそなけれいかなれば

あるあさいそのかなたより
はもぎの髪をかきみだし
思はるゝまぢやつれたる
かゝる姿のひとにても
俊寛僧都と申すかた
問ふわれこそは忘れられ
これはとばかり倒れ伏す。
なきまどひのゝ有王は
かゝるべしとはしらま月
逢はんとこゝに尋ね來し
またもうきめを見せるかと

くどけばやがてよびがけり
汝に逢ふことの夢ならば
あはれなみだに沈む身の
あけ暮なげきをするがなる
よしやあれども都なる
思はぬ時のなければや
をろかなる哉去年の秋
残さるゝ身のつれなくて
はままるなかれいましはし
なぐさりあきし成経が
そをたのみつゝ惜しからぬ

夢かうつゝかまぼろせか
覺めてのゝちはうたかたの
命はつゆの玉くしげ
田子の浦波たゝぬ日は
妻とゆかりのものどもを
かぐこそ弱り果にけれ。
われのみひとりこのしきに
死なんどこそは思ひしに
ゆるさるゝ日をまてかじと
よしなき言にあさむかれ
いのちをさてもなからうて

うきひとあくるはかなさよ
かすゝあればわが家にて
をしふるまゝに有王は
竹のはしらに蘆のはり
雨風ふせぐよしもなき

猶はなすべきことゝは
つばらに語りきかせんと
僧都を背負ひて行くほどに
やねもめぐりも松葉にて
いとあさましきいほりあり。

かへるうき身となるも皆
思ふものからあさましや
免されかへるそのとき
つかひのごとく汝も亦
ひとより文のひとつだに
どへば答へていふ言の

さぞな昔のちざりぞと
去年 成経と康頼と
むかへんために渡りける
思ひつきせぬふる郷の
持ちきたらぬかいかにぞと
むづかに聲をふりたて

君にわかかれて北の方
をさなき人の失せにしを
いぬる彌生のふつかの日
いまは姫御前ばかりぞと

三人流されあはします
ひとり残され給へるぞ
わたらせ給ふその嶋へ
女たるみのかなしさに
この有王をともなはれ
かかれたるにそはかなけれ
心のまゝのものならば

鞍馬の奥に志のびしが
いたく歎かせたまひつゝ
はかなくならせ給へれば
その玉章をわたしけり。

人どものうちいかなれば
あはれをこの身なりせば
尋ね志のびて行かましを
涙のふちに瀾るれば
いそぎのぼらせ給へよと
もしも此世は俊寛が
故がいふ言をまたざとも

住みなれにけるふる郷の
歸れるものを恨めしや
こよみなければくさ木にて

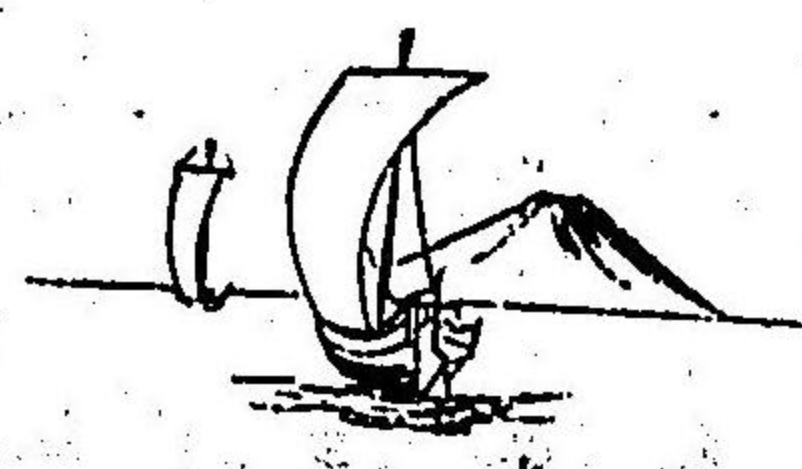
月花をまたながむべく
あたら三とせのはるあきを
送るとぞ知る鬼が島。

うきよなきけり色かへて
思ひしらるゝわが妻
ながらへたるに妻と子に
今はなにをか望むべき
かへるが如くわれも亦
ものも食はでありしかば
むなしきからにとりすがり
はしるなれば有王は

ちるはならひの木葉にも
かくやつれつゝつれなくも
後れにけりとさきくからに
鳥はふるすに花は根に
さきよにこそ歸らめと
つひにはかなくなりけり
歎きさげべとよびかへる
其なきからをもしほ火の

煙をなしてほねをさめ
漕ぎ行く跡は浦さびて

くびにかけつゝ都路へ
聞ゆるものは浪の音。



老木の花

(齋藤實盛)

雲か霞かまら旗を
みぎひだりより四萬餘騎
風だに吹かば散らんとぞ
親は子を捨て子は親を
時しも聞き夜半なれば
谷はかばねの山をなし

五月のそらにひるがへし
関つくりつゝ攻め寄れば
思ふ平家の木葉ぶし
かへり見ばこそ通け行くや
知らてぞ落る俱利伽羅が
血まほの川を流しけり。

あないみじくも勝てる哉
力をもてる大丈夫も

谷の底には山を抜く
さめ口夢をぞ結ぶなる

流れも清きみなもとの
かちほこりたる兵士を
篠原へこそ攻めゆけば
あるは落ちゆき或は又
落ち行くもの、其中に
崩黄威（ひょうおうい）のよろひつけ
只一騎（ひと）のみたちとまり
いかなる人にあるやらん
木曾義仲がいきほひに
いかなれば死をいとはずて

木曾義仲はた、かひに
率ゐてなほも加賀國
平家のこゝを守るもの
兜のひもを解くもあり。
赤地の錦身にまどひ
あし毛の駒に打乗りて
ふせぎ戦ふ若武者は
うしほの如く押しよせる
あたりかねつるひとり身の
駒の口へと進み入る

木曾の方より名のりつゝ
あな優しくも只ひとり
云へば彼方のものゝふは
いざや組まんと近よれば
つはものどもはあしへだて
突き出したる光盛が

手塚光盛進み出で
どいまり給ふものかなと
よき敵とこそ覺えぬれ
主を討たせじと従へる
ならびてくめる其ひまに
及にあはれ仆れけり。

此うたれける武夫を
世に名も高く知られたる
實盛つねに思ふやう
ふりにし雪のかくまで
身となりしゆゑたゝかひに

誰とかがおもふ思きや
齊藤別當ならんとは、
我もいとせの半をも
つもりくゝてまら髪
いでい先驅（せんきょ）あらそは

大人氣もなき老武者と

人にあなごり受けやせん。

三十二

朽惜しうこそあるべけれ
されば此世をわき艸の
今日を限りの死出の旅
きてこそ歸れ年波の
若やかに身を装ひて
むかしの春の面影を

人の悔り受けん身は、
風のまに／＼なびくより
錦の直垂ふるさとへ
敷つもれどもわかぬ浦
黒く髪鬘染めしがは
みさへ老木の花に見る。

青葉笛

(直實)
敦盛

名のみなりけり津の國乃
草葉にむすぶ白露の
碎け散るこそはかなけれ
昔の春の夢覺めて
やたけ心も弱りつゝ
あはれ藻屑となりはてし
月の夜すがら敦盛は

生田の森の夕風に
玉にやどかる月もまた
都の花に戯むれし
いまは力もつき弓の
なげきも深き西の海
平家の末ぞあそろしき。
城の中にて音も清く

三十三

ふきすさびにし笛竹の
ならんとはいさきら雪の
襲ひきたりし義経が
城も砦ものどりなく
ともる平家のもどもは
命惜しむがためならず
見とやけて後失せなんと
蘆毛の馬に鞭うちて
汀のかたへ進み來し
敵にうしろを見せたまふ山
かへさせ給へど日の丸の

よをはかなくも捨つる身と
積る深山をふみ分けて
打手にいたく破られて
焼き拂はれし一の谷
遁ぐる道をぞ失ひし。
にぐる味方の行末を
思ふばかりに敦盛は
沖の船へと泳がせぬ
熊谷次郎なほさぬは
つたなきわさをなさずして
扇をたかくかさしけり。

招かれかへる敦盛を
首を掻かんと直實は
綻びそむる梅の花
手折るもをしく酌むも惜し
わが小次郎にその齡
討ちはたしなばこそ子を

波うの岸に組みふせて
其顔容をうち見れば
清水にやどる月の影
そもく君は何人ぞ
ひとしく見ゆる君をいは
わが手に殺す思ひせぬ。

いでく助けまゐらせん
いひつゝあををふり向けば
打手の影ぞ見えにける
たすけまゐらせ申すとも
兵士どもはのがすまじ

はやく落ちのび給へよと
土肥梶原が率あつる
あれ見たまへや今きみを
雲の如くに寄せ來たる
とても死ぬ身の同じくば

我手にかけて御あとを

なさけの雨は咲く花を

弓矢の家になほさねは

くやしかりつることをすれ

つらき憂きめに逢ふべきや

かきたる首をつゝまんど

錦のふくろに納め入れ

あつくとぶらひ申さばや。

散らすもあはれ時なりや

生るればこそなか／＼に

さなくばなごてか／＼ばかり

あな悲しやと嘆きつゝ

鐘直垂とさみれば

腰にさしたる青葉笛。



萩の花

(小栗助重 照天姫)

まのびかねてや助重は

「風のひらきも山の音も

袖のゆかりの尾花まで

長きおもひをまかの浦

そなたの園にうつくしく

誰になびくかまら玉の

手づから折らせ賜はらば

めでながめなん身につもる

まがきのもとにたちよりて

心をくたく種なれや

露にしをるゝ秋の夜の

なみだにくもる折なれば

真萩の花のさきしより

露に色とき一もどを

筒にいけつゝあさ夕に

うさをなぐさむ友として。

いなむ心にあらぬども
「實にや優しき言の葉の
やがて色香もうつろひて
すいめまゐらせ申すども
また其のすがた衰へて
はじめのなさけたまはらで
いなそれよりも真盛りに
萩の花こそめでたけれ

それと悟りし照天姫
露だに惜しう思はねど
つひに散るべきこの花を
君をなぐさむよしなけん
志ほみはてなば中々に
ふり捨らるゝことぞうき
其方の増間に咲き揃ふ
色ひとしほのながめなれ

「咲きそめてよりいくたびか
あはれ一もど得まほしき
をしう思はせ給はずば

そなたの園を打ちながめ
望はやまじやま鳥の
かく美しくさきみずる

萩をこひつる心根を
つれなきとをのたまはで
貴きもまたいぢしきも
かゝる願ひなとがめそよ
うつろはめどもしかずがに

いかであはれとちほしめし
ゆるさせ給へ世はなべて
花をめづるはならひゆゑ
假し色こそは時へなば
なさけはよそにうつさねば

せちにこはれて力なく
たをりてそれとさし出す
「君をほじめて見てしより
思ひそめたる紅葉の
日にそひ深くなりゆけど
便宜なければひたすらに

みづから萩の一枝を
手を助重はとらふつと
人こそ知らぬいみじくも
心のいろのくれなるは
それと思ひを知らすべき
胸にこめつゝまのぶ草

葉末にむすぶ露の間も
衣かたしき寝る夜にも

君とかきぬのもとに立ち
うれしき言を聞きけりど
あどろかさされてめざむれば
庭の草木を吹くなべに
聞くぞかなしき悲みの
さすが千鶴はあゝるものを
かわきかねつる其ゆゑを
人には云はでまのふ草

きみの面影たちさらで
また見ゆるかな夢の中、

いと陸じく語り合ひ
思ひしことは夢なりき
身にしむ秋のさよ風の
雲井にわたる鴈がねを
おもひは胸にみつしほの
袖のなみだのいかなれば
悟りたまはし戀しさを
まのぶにあまる色を見よ、

誰か爲めなびく眞萩摺
夜さむの露のちきもせず
長きなげきをすまの海士
さながらやとす秋の夜の
人目の關にへだてられ
いとくるしくも忍びしが
君がこゝろをたねとする
結ひ給ひしをたまりにて
「戀すればこそ世のなかは
濱の眞砂のかざならぬ
ぶかきめぐみを見るうへは

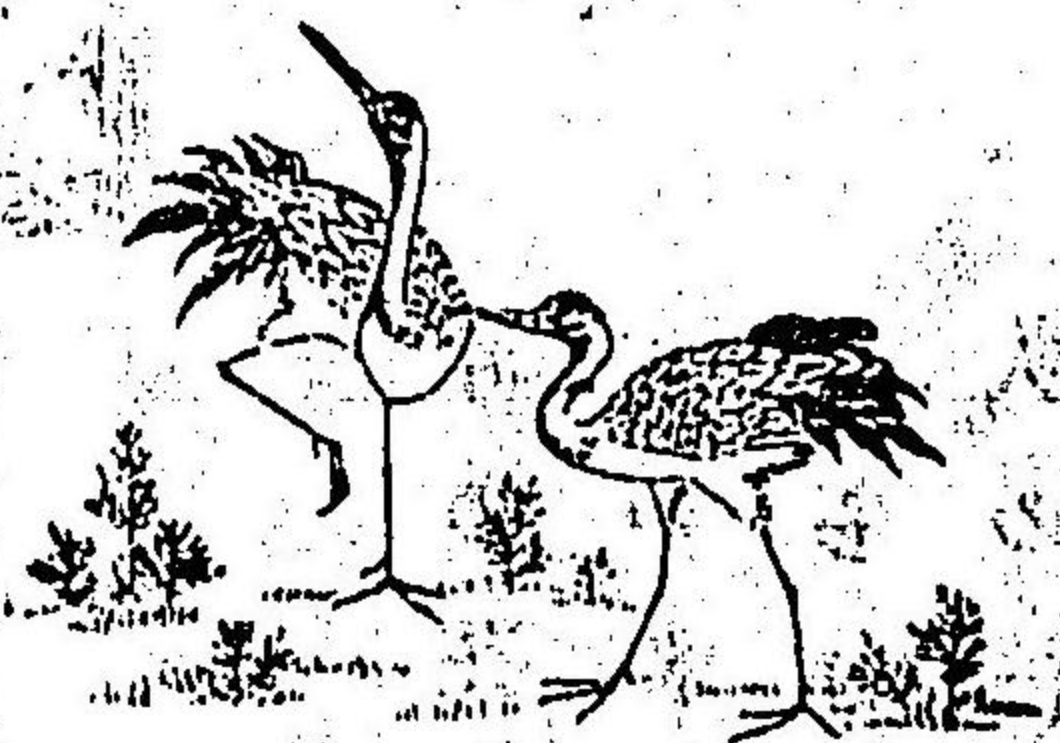
花のみだれも君ゆゑに
ぬもせで夜半をあかしつゝ
まほたれ衣ほしやらで
つきせぬ戀を今宵まで
かひこそなけれさゝかにの
この夕間暮萩の枝に
三十あまりの言のはを
今こそもらしそめぬれや、
いよゝつれなくありそ海
身をかくまでに愛で給ふ
何をかつしみ申すべき

われこそ君をかねてより
萩のうは風きるべにて
露のたまちるおしたにも
垣根のもとに立ちよれど
おはでの浦にやくまほの
なみだぞまげき芦垣の
老のびたりしが水々きの
君にあふ瀬のあさからぬ
おはれ聞くこそうれしけれ
うつろひやすき色なれど
變らぬ松のみさをもて

またひまめらせまうしつれ
まみゆるよしもあらんがど
霧たちのぼるゆふべにも
面影さへもなかくに
けぶり絶えせぬちもひせり、
まぢかけれども今宵まで
はかなきあどを志るべにて
なさけぞこもる言の葉を
人の心は花ぞめの
われは千歳のふかみどり
行末ながくそはまし」と、

たがひになびく戀ぐさの
夫よ妻よとよびかはす

すまはめでたき實を結び
ちざりも長き萩の枝。



つる木の花

(阿新丸)

賤のいほりのいぶせきに
降れるを見なば情なき
ましてや前日めしうど
失はるべき日は来ぬと
阿新丸のなげきこそ
かゝるうき世にながらへて
父のながされおはします

うの花くだし五月雨の
ものも袂をしぼるらん、
ならせ給ひし父上の
人の流言に聞き及ぶ
特にひときはまなりけり。

なんのたのしきことやある、
佐渡の國とは何處ぞや

たとへ虎伏す野邊にても
なに厭ふべき難波瀧
せめては共にうしなはれ
この世のいとまをばはれけり
佐渡の國とは都より
行き通ふ人もなしと聞く
われはまばしも生き得ずと
とまる色も見えざれば
一人のどもを召しつれて
菅の小笠にいくたびか

鯨のよする浦にても
みをつくしても尋ね行き
よみちの旅の伴せばや。
母のかなしみ深かりき
道の遠き島にして
かつ今汝に別れなば
なきいさむれど中々に
ちからなくく許しけり。
ならはぬ途に出でにけり
露をやどせし草まくら

旅寝さだめぬとことばに
越路にたどるかりがねの
山をふみ分け野を越えて

父と母を思ひつゝ
ふみ行くさまはまら雲の
今日は教賀の津にもきぬ。

八重の潮垣こぎわけて
やかて佐渡にぞ着にける
岸にくだくる浪のかげ
汀にすたく浪ちどり
焼くやもしほの夕煙

こゝとはいさやまらま写
島の浦をを見わたせば
はかなきさまをかこちけん
あぢきなき世をなげきけん
絶えぬ思ひにこがれけん。

あなものすこきけしきかな
父のなげきはいかばかり

かゝるところにあはしはず
ふかゝらんかと思ひやり

涙にくるゝばかりなり
袖なほ寒き春かぜに
散らぬさきにとうぐひすの

此處は都と時かはり
亂れさきぬる櫻ばな
いそぎ來しこそあはれなれ。

本間が厚きもてなしに
父に逢ひ見て其のちの
心なぐさめまづるこそ
早くあはせて給へよと
ひとめたりともゆるさねば

やゝ嬉しくは思へとも
都の事をきこえあけ
こゝにこし身の望みなれ
いかに願へどまかすがに
たゞ涙にぞ送りける。

焼野のまゝす夜の鶴
父をまたうてはるゝと

子をし思はぬ親ぞなき
尋ね來つれどあひ見るを

許されずとはなに事ぞ
ながめでまのぶいとし子の
こゝにありとは夢なるか

晝は都のかたのみを
はからざりけりまのあたり
うつゝに逢ふは難ければ。

厳しく手かせ足械に

いましめられておはします

わが父うへともろともに

穉きわれを置きぬとも

何のあそれか有るべきに

あな情なや恨めしや

只思ひぬのゆめならで

同じ此世にありながら

肉を分けたる親と子と

あふよしなくて過すとは。

五月の末の夕まぐれ

資朝卿は子をおもふ

心にいたくひかさされて

袖の涙をまぼりしが

悟ればなにか悲しかる

我たましひはかざりある

むぐろにやどりかりごもの

亂るゝ世をしたち風に

故郷とはく流れ木の

花はあへなく散りにけり。

あはれ今世のおんすがた

たゞ一目だに拜まんと

渡れるものをなさけなや

終に逢ふこと許されで

かくあさましく變りたる

骨をみるこそかなしけれ

よしや阿新父うへに

似ぬ愚昧なるものなれど

恨みを晴らしみこゝろを

安んせずして置くべきや。

俱にみそらを戴かば

身の耻ならん仇さくら

今宵散らさやまんやと

夜半の嵐をたよりにて

海客路遠處北者のひ入り
思ひ知れなきを呼ばぬて
ほまれの色はうつろはぬ

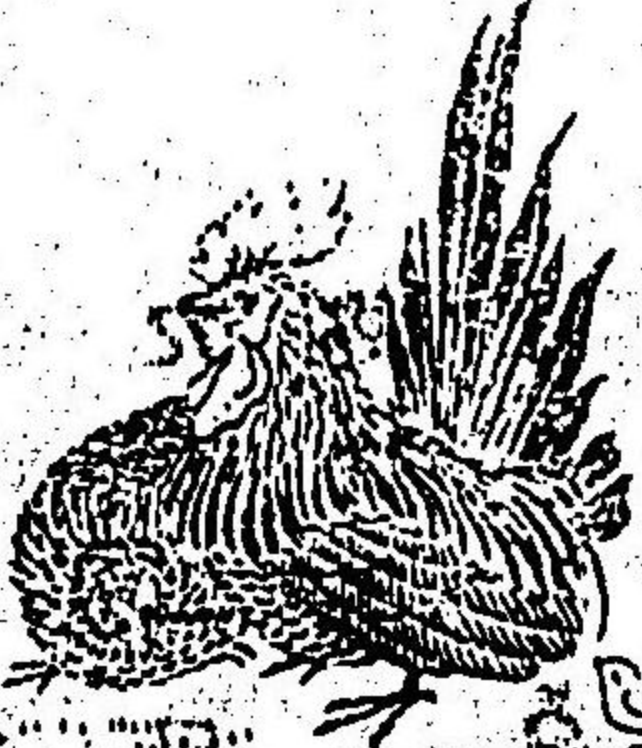
枕守のたててく親の誓
胸元をかぐ貫ぬけば
花こそ咲けれ太刀の枝に。

あはれを御をしをしを
あしや國語をいひ
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを

あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを

あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを

あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを



村の時雨

あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを

あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを
あはれをまじしを

あやめもわかぬ闇なれば
山を動かすときの際
跡追ひ来しとわやまたれ
やつれたまふぞあさましき
あらしめされし大君の
峰にたなびく若ら雲の
世となればこそわらかぬの
雲井を出てさせ給ふには
かりそめたにもあんあゆみ
みこころばかり赤坂の
なれぬみ足はまゝならで

路を迷はせ給ひけり
をちこちすごとく聞ゆれば
烈しく吹ける雨がせに
かたじけなくも天ヶ下
玉のすがたのかくまでに。
其ゆくさまは定まらぬ
土をし踏ませ給ふなれ
玉の御輿にめしのりて
ならひ給はぬことなれば
城へのそがせ給へども
夢路をたどる御心地。

秋の末野の淺茅生に
人のかよひ路なきをこそ
つかれをやすめ忍び行く
みちのほとりの草かげに
袖をかたしきふし柴の
有王山のふもとまで
つらしと離れかいはがねを
ゆめかうつゝかうたしぬの
谷間にひづく水の音
またもや雨のふりくると

置きそふ霜を踏みわけて
たよりよけれと息ひては
晝はひとめを憚りて
御身をかくし給ひつゝ
まばしる安きあもひなく
覺束なくも落ち給ふ。
かりの枕となしたまひ
夢を結ばせたまへども
梢をはらふ松のかぜ
まばし木かげに立ちよれば

御袖はかきしる下つゆの
笠置の山を山を山を山を
現もゆめもみゆるなり
まろしめされしあめかした
なきこそめはれ悲しけれ
たのむかげとて立よれば
あきぬも今はまじならぞ
うらみかたなる高時の

水のあはれちかして行く
かくれ家もなき天宮下。
いとまたあをきもほ君の
昔とかはりかくれがも
情なき世にこれのあは
なほ袖ぬらすすり露の
かきしるうきめに逢ふともしも
さむなるこそくやしけれ。

空になひかす風なきや
玉のうでなに樂みし
今日ほがなびや六波羅の
軒端の松の杉時雨

九重ふかくおぼしめし
昨日も夢とみるばかり
いづれあはれ給ふなり。
袖のなほほろり給ふなり。



水の沫

(淡河時治)

望つなげる六波羅も
今はいかでか戦争に
またがひ来る兵士の
夜半のあらしに一片も
ひとり淡河時治は
世になからふもうしが原
時治妻に云ひけるは

攻め落されしよしなれば
勝つべきすべのあらんとて
落ちゆくさまはさくらばな
残らで散るに異ならず
まことの心ありしかば
露と消ゆるをまつばかり。

「あはれ二人の子供こそ

ことに幸なきものなれや
昔ながらに散らさん
男の子にしあるうへは
敵は命をたすけじと
わが手にかけてもろ共に
おんみはなほもはつぐさの
人にたよりをもとめられ
樂しきとしを送れかし
安くこの世にあらんこそ
うれしく眠ることを得れ
知れわたるとも女ゆゑ

咲くべき花をまちやらで
よに忍びざることながら
たとへ稱きものなれど
おぼゆるほどにちなじくは
よみちの旅をいそがなん、
若き身なれば老かるべき
ひごろのうさをなぐさめて
わがなき後にながらへて
われは草かけ苔の下
よし時治の妻なりと
命うしなふことなけん。」

「高し」の漢の仇なみの
 十の世にのみまるとし月の
 ぶかき契を結びてし
 世にながらしてさくらぬたに
 わがつまならぬつぎをまた
 つれなくのたまふ心こそ
 身をやきころすものなるを
 六の世がほどもはくみで
 らのりそだてし甲斐もなぐ

かたなる言なのたまひそ
 うきたのしみをともにして
 身のひまさらにつれをなく
 重きが上のさよふさるも
 かさぬることやなすえきは
 恨みてもなほあまりあれ、
 離を翹にかくじつづい
 ふどころの中袖の下
 千代も入千代もながれを
 のぼる朝日をまぢかねて

消えなん露のいとし子に
 づきかむは身はしほはした
 見たまふ水にすむ鶯の
 襲かはししちさりをば
 行来なのがくそはまじと
 むかしの夢と忘れんや
 贖みなき世にながらして
 互ひに歎きなげかれて
 折しも敵のさきほひは

さきたれてはかなしみの
 鳥があらはるゝわすれぬを
 まいて人とし生れのを
 死じてはあなむ昔のそ
 おひちかひそし言の葉を
 夫にすてられ子に後れ
 涙に袖もほほはあへん
 箱のわたしをうを越えて

改めきたりぬと聞ゆれば
もしも捕はればつかしめ
のちの世までもくちをしと
入れて乳母にかゝせつゝ

よろひの櫃に入れられて
ものゝあはれを知らねども
父の心やいかなりし
思ふばかりにみをつぐし
花さく時をまちやらで
うき世のめらしうらめしと

かくてあるべき時ならざ
受くるおごときこもあらば
子供ふたりをから櫃に
淵のそこにとしつめける。

昇れ行く子は釋くて
はるかにあそを見て送る
其ゆくすきを見まほしと
そだてあげたる子櫻の
二本ながら吹きくたく
血になきまよふはとどまらず。

あなじくわれも其ふちに
すがりて歩み行くほどに
母よちづくゝいかなれば
是によ乘られ給へなど
願むるゝさまあどけなく
あもひはいとらまゝりきて

身を沈めんと櫃の緒に
鎌倉河に着きにけり
徒にてあゆみ給ふぞや
ふたりは顔をさしあけて
見ゆるにつけて悲嘆の
涙にまづむばかりなり。

こゝはどさなきものどもの
いで今連れて行くほどに
教るまゝにまたがひて
聲たからかに唱ふれば
やがて三人のあめとして

うれしく遊ぶ所なり
かく念佛をまうせよと
西にむかひて手をあはせ
母のなみだは限りなし
かきいだかせてもろ共に

みぎりの淵に飛びぬれば

消えては同じ水雲の沫。

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

落さずには舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

さかき舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

しんはれ舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

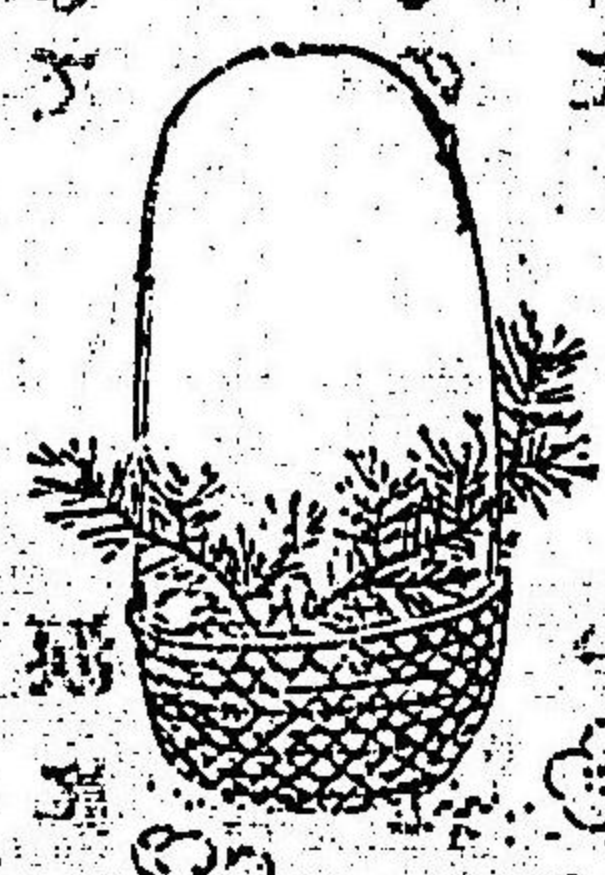
舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け

舞臺のほかに舞臺を築け



憂世の嵐

(二の宮)

生者必滅會者定離、釋尊尙は栴檀の煙を免かれず、鷲鷲また隔波の恨を存す、盛極衰端樂盡哀來、皆是れ法界の情にして、天人も亦五衰の日に逢ふとかや。〇「
塵焼く煙を、戀ひかぜに靡かせ、借老苦下の契を結びてより、相揃へてしか
ら衣、日もなほ遠かるに、悲しや袖のわかる、時となりけり、治盡きて亂
來るに、國の常なれや、世はかりこの亂れみだれて、元弘二年彌生の頃、
吉野の宮中務御親王は、土佐の畑へぞ流され給ひける、都の花を跡に見て、今
旧を限りと眺むれば、時雨に御袖はほれぬ。〇 時雨に御袖はほれぬ。〇
は、御衣せきをむるしがらみもなき泪川

今日も昨日も、時雨のかたにたがらぬ、浮身なるらむし、かたも時雨も
ひどりのれなき月日を、土佐に送りまひてき、時雨しや浦波たぐぬ日はありと
も、ひどりを思はぬひどりをなき、君もなほ舞臺を知らず、みよしの、吉野の山に
雪はあはれども、歌じけぬ、昔の歌の忍はれて、唯舞臺の淵に沈み給ふのみ、時

に、御警固に候ひける有井の庄司といへるは、宮君の餘りになげかせ給へるを
 いたはしく見奉り、御息所を此處に忍ばせ給へよと、すゝめまつりぬ、宮は限
 りなく喜ばせ給ひ、秦武文に御文をもたらせ、迎への爲に、都へ遣はしけり。
 今日か明日かと、指折りふせて待ち給へども、待にし人も武文も來らざりけ
 り、唯立ちかへるは、沖の白浪ばかり。
 尼が崎にて、松浦の徒に襲はれ、武文は身を殺し、御息所は奪はれたるを、
 宮は夢だに知るよしなれば、唯むらきもの心をくだき玉ふのみ、あはれさ
 しかたのくもらぬ空にだに、常に御袖をしぼれることよ。
 かくうき年月をくらし、ほどに、朝敵全く滅び、すめらきの大君は、隱岐の
 國より還御し玉ひ、宮も亦都にかへる身となりて、再び金殿玉樓の客とぞな
 られにける、又御息所の尙ほ武島に存らへ居ると聞き給ひ、使をやりて都に
 迎へければ、愁の御眉こゝに始めて開かせ給ひ、樂しき日々に、其年もいつ
 しか暮れにけり。
 一喜一憂ぞ世の習ひなる、建武元年の頃より、天々下再ひ亂れにけり、清き
 流を尋ねてぞすむ月の影だにも、波に姿を碎くなり、程なく宮は、金崎の城
 にて、秋の霜とぞ消え果て給ひし、其後御息所も亦なげきの花と散りにけり、
 憂世の嵐恨めしき哉。

ながき思ひにこがれ行く
 なみと風とにまかせつゝ
 雲のはたてのほどとぎす
 いとひがたきちん袖に
 柴のとぼその志ばくも
 なみだは枕にむすべども

身のうき舟はまゝならで
 末のとまりは土佐の畑
 なくや夕はつまを戀ひ
 松の下つゆふりかゝり
 磯うつ波にめさめては
 都にかへる夢はなし。

荒れたる宿のやれ垣に
 散りなばちりね樂しくも
 命をさてもながらへて
 思ひつきせぬふる郷に
 待ちにしかひはあらいその

歎けとや咲くうの花の
 あらぬうき世に惜しからぬ
 現ならではゆめにだに
 せめては志ばし歸らんと
 なみだの深き海にこそ

うきくるしくも沈ませて

月日を送り給ひしか。

みそでの露の玉の緒の
きをれ給ひしちんすがた
かくまでまたひたまひなば
こゝにまゐらせ申すとも
庄司がなまけに一の宮
さて武文をつかひとし

絶えぬとばかりなげかせて
みる目もいとも哀れなり
御息所をきのばせて
何かくるしうあるべきと
ふかくうれしと思召し
いそぎ都へのぼらせぬ。

暮れゆく天の雲はれて
袂のかわくひまもなく
土佐の畑とはいづくかも

月の光は清けれと
あぼろに見えぬ時もし
合宵はいかにあはすらむ

さぞな昔をまのびねの
思へばげにもくちをしや
なきよの敷に入りたまへ

夢は都にかよふらむ
せめて歸らぬ旅に出で
さらば逢ふよしあるめれど。

あなむこの世にありながら
つだてゝ風のたよりだに
門に茂れる八重葎
身のつれなきを重ねても
涙のつゆのたま琴を
いたくむかしのきのばれて

ながらふこともうみ山を
たえてなきこそかなしけれ
さびしき宿のものうきに
ひとへにまぼる衣手の
かきなすいとの亂れつゝ
軒もる月の影くもる。

磯の松が根岩がねの

まくらにゆめを結びつゝ

旅路をいそぐ武文は
むかしの宿を尋ねれば
虫のねのみは今もなほ
繁れる草と木の葉とに
音なふものも住む人も
いつくに志のひあはすかど
こゝもうきよの嵯峨の奥
うしとみつゝもながらへて
里のいぶせきかくれ家に
いかなる人の果ならん
柴の折戸にたちよれば

やがて都につきにけり
松の夕かせ月のかけ
かはるさまなく覺ゆれど
埋もる庭の路うせて
なければいとも荒れ果てぬ。
をちこちたづねゆくほどに
身をやる方の老られぬば
いといらみは深くさの
あやしや琴のねこそすれ
むかしを老のふまらへかど
きくなれにける爪の音。

かゝるものうき住家とは
琴のまらべをたよりにて
うれしき涙とまりかね
みすのうちにも泣く聲の
武文こそは宮さみの
これまで上りまゐれとて
「雲井の月となりならん
見ゆるとちもひする墨の
あらふなみたとおぼしめし
きつくなれにしかから衣

いさ老ら露のたよさかに
尋ねる人に逢ふことの
まばし言葉もいでやらせ
聞ゆるばかり音もなし
あはせをうけてはるゝと
御文をさしげまつりけり。
そらにこひしき影やもし
うすくかきつる玉章を
うすき情とみたまふな
袖のわかれのかなしさに

梢にわたる夕あらし
こころなきむよしもなく

衣かたしきまきたへの

猶もさびしきひとりねの

つきひもあだにくれ竹の

くもらぬ空にほしあへぬ

あけくれうきをみち鳥

たれ故郷の方のみを

いかなる夷の果にても

世のうき事もたへぬべし

七十

いそにくたくる涙のあと
ねをのみそらになきわたる、

枕のちりははらへども

敷つもるこそうらみなれ

まげき思ひはます鏡

袂のつゆの玉くしげ

羽根あらばこそかへらめと

ながめてくらす身をよもへ

共に住みなばうつせみの

今もむかしのかね言を

まもり給はれ武文を

いそぎこなたへ下れよと

露はたもとにあまるなり

せめてや憂をなくさむと

そもわざはひはかねてより

ふせがんよしもあるめれと

尼か崎にぞ事もなく

風をこゝにてまぢつるに

杖とたのめる武文は

其身は舟に乗せられて

道のしるべとともなはれ

なさけもこもることの葉の

かゝるつれなきすまひより

やがて旅路にいで給ふ。

はかり知らるゝものならば

神ならぬ身はずへもなし

着かれ給ひて便りよき

ある夜松浦に襲はれて

うらみをのみて討じにし

遙かの沖にこがれ行く。

七十一

夢の浮橋うきしづみ
行未しらぬ身にあれば
あはれ藻屑と果てぬべき
武島と云ふにたいひとり
つれなき庵に日を送り
なみだに袖はくちはて
土佐の畑には宮さみは
夢にも思ひ知らざれば
忘るゝことはよもあらで
待ちわびにける甲斐もなく
身もうくばかりなきまどふ

見てもしのばぬ濱千鳥

じづこゝろなく思ひぬの
なぐさむほどの夢もなく
くれては明くる春の日に
花さくならひなるものを
露のちもひをすまの浦
うき世の高き仇なみに
知らぬは頼むこゝろあり
まぢつるほどに都より
たづね給ふに去年の秋

世をうみわたるあま舟の
絶え入るばかりなげきつゝ
命をさても助かりて
つきしことこそあやしけれ
海士のなさけにしのげども
やどさん月もなかりけり。
かゝる異事ありしとは
をしかの角の束の間も
今日かあすかど松浦瀉
ひとり歸るは波のみに
あはれ逢ふことかたみとて

あどふみつけよわが袖に。

夜半の衣をかへしても
なみだのうちこそその年も
深山かくれの老木さへ
たゞわれのみは秋の夜の
沖の釣舟楫をたえ
果てなん時をまつばかり。
もしやいかにも思ひつゝ
下り來れる人あれば
みやすどころは武文を

ともなひたまひ土佐へこそ
さらば道にて奪はれて
みくづとなりてはてしかど

今はこの世になき人と
吊らひ給ふぞあはれなる
亂れし四方の雲晴れて
花も咲ひてうぐひすも
ならさぬ御代と治まれば
歸られ玉のうてなにて

きのふとかはり今日の身は

くだりにけれと答へられ
うきめ見つるかさもなくは
出るなみだもなかりけり。

おもひさだめてその跡を
かゝりし程にかりこもの
のぼる朝日子影きよく
おかしくうたふ梅が枝の
宮もみやこにつゝがなく
昔のゆめを結びけり。

楽しく日々を送れども

御息所の失せにしを
はからざりけり淡路なる
あはしますぞと聞き及び
都にむかへ給へれば
浦島がこどもははれて

窓うつ雨に明けやらで
袖をまぼりし秋の夜の
花のあしたに月のよひ
玉の酒宴をひらきつゝ
盡くし甲斐もあらたまの
さしも治まる御代はまた

なげかぬひまもなかりしが
むしまに荷もながらへて
いそぎ使をくだされて
常世を去て歸り來し
ともになみだの玉手箱。

雲井にわたるかりがねに
うかりし時とひきかへて
こがねの殿にたえ間なく
心のまゝにたのしみを
年のくれ行く冬のころ
みだれてくもる天ク下。

逢ふはわかれの始めかや
よろこびのまじりきせぬに
野末の霜ともる共に
つれなき園にひとりふし
御息所もいつとなく
なげきの花は散りにけり

はからさうけりあふしもの
また別るゝぞあふさじき
宮は消えはて給へれば
かなしきゆめをみるにつけ
わづらひ給ふ時ともなく
あはれうき世の嵐かな。



燕尾香

(藤見尼)

まばしかりねのとも枕
野やまも里も花鳥の
相馴そめしなかなるに
君が一夜のなさけには
かへなんものと一すぢに
まのお心にしばくも

ひも長閑なる春のそら
彌生の頃にゆくりなく
宿世のくにし深かれや
わが百歳の生命だに
菊池七郎武吉を
たてし操はわたならず。
なさけの道はうとからず

藤子がつくす真心を
袈をいくよ重ねつゝ
變ることなくありぬべし
國にともなひ歸る日を
言の葉露の玉くしげ

あはれとちほし鶯鶯の
この世のみかは後のよも
やがてまことの妻となし
まのひまてよと慰むる
ふたりの契深かりき。

思へることほうたかたの
料らざりけり足利は
西の國より攻めのぼる
討手となりて都より
この武吉もしたかひて
馬に鞭うちたゝかひに

消えて果敢なくなれる哉
軍勢をこゝら率あつゝ
風評はよもに聞ゆれば
さし向はるゝ義貞に
弓矢たばさみ鎧着け
出る身とこそ成にけれ。

あはれ今度のいくさこそ
さらば此身もよに生て
別離はいとゞ惜けくて
髪の一ふと切はなち
書き遣したる文に添へ
これをなせよと使者もて

味方の勝たんすべなけり
歸るべしとも覺えぬば
やがて都を出でし朝
思へるまゝを細やかに
なからん後の記念とも
藤子がもとに送りけり。

ながれも早き明日香川
契りかはしゝ言の葉は
誓ひけるこそはかなけれ
星のめぐりはつたなくて

淵は瀬となる世なりとも
よも枯るゝことあるまじと
これや限りと知らぬとも
野山の露どもろ共

身は消えたりと覺えなば
是をかたみと思ひなし

逢ふはわかれの始ゆを
いたくな心なやましそ。

わがなき後は麗はしき
滯き流をむすぶとも

花の木蔭に宿るとも
心のまゝにくらしませ

されど草葉の露だにも
人にな告げそ願はくは

我と契りし事ありと
これのみ堅く守れよと

書きたく墨のあと薄し
ながき別離をおもひやる

さすがに猛き大丈夫も
なみだに筆や洗ひけん。

いかにとばかり歎かせて
開きつとちつ幾たびか

なみだの露の玉章を
くりかへしつゝ如何なれば

かゝるつれなき御言を
假しや此身は賤しがる

あはれ遣させ給ふとや
理のつとめをなしんども

濁りにしまぬ蓮葉の
あな朽借しや悲しやと

清き心根あるものを
藤子はいたく恨むなり。

かゝれば今は歎くとも
何をか望み求むべき

云ふともかひはあらし世に
いでや昔のかね言を

守る眞實を知らせんと
さをもしげなく切捨てよ

思ひ亂るゝくろ髪を
其ひとふさを文にそへ

つかひの者にかへしやる
ひざり泪にかきふれて

あどは憂世の恨めしく
かたしく袖を絞るなり。

長閑き春の日となれど
花咲くすべもあらざれば
かゞりし程に蟬のこゑ
ひとへに夫の歸る日を
待ちにしかひも情なや
淺河にてうたれしと

この身は今や埋木の
嬉しきことさるなかりけり
膚涼しき夏はこころも
若しやとまつの操もて
五月のすまに武まじは
をちこち人は云ひ傳ふ。

ひも重ればいつしかに

淺河にぞつぎにける。

見渡すかぎりものすまじ
屍は岡とあやまたれ
いとすまじき戦争の
味くや松風なまぐさく
おれもむかしは女郎花
折れつをられつちく霜の
こよひはこゝにくさ枕
ぬられぬまゝに露しもの
となつて鉦を打ならし

劍くだけでぬのるたを
血も肝は河とながれける
跡こそたゞにまのばれて
唧くや虫のねものうしや
火めもくさる枯尾花
消えてはかなき命かな。
かたしく袖のうらかなし
あきてよすがら稱名を
跡とぶらぶらあはれなる

ふけ行く空のさよ風
よの寂しさを重ねても
長き恨みは汝よりか

時しもおれや萩の葉を
よろひの袖もくさ摺も
朱に染みたるものよふは
こはそも怪しなにびと
あな懐しやあき草の
世になき人と定めたる
なきよまでも契りける

身にしみわたる寒けさに
ひとへになくや秋の夜の
われこそ勝れきりぞす。

吹きゆく風ともろとも
つるさも楯も月もまた
藤兒の前にあらはれぬ
頭をもたげ見ゆれば
つゆ思ひきやうのせみの
武吉のきみならんとは。
わが夫なるか嬉しやと。

縫りつかんと遊ばれば
亡き靈なれやぐやしくも
都をあとにかへりみで
誓ひしことはうたかたど
あはれわりなくかね言を
みどりの松のみさをもて
思ひまのばれなき跡を
いぬる早月の末ッ方
血になく空の小夜更けで
敵に襲はれはしなくも
打破られてわれもまた

いよめれこそは武吉の
この春なれに立を別れ
とくにつきしがはかなくも
消え失せしこそ恨みなれ
遠へしものと思ふなよ。
はかなき我をかぐばかり
用はるゝぞうれしきや
いざ歸れよとほどくさす
風も草末も眠るころ
味方の軍勢ちりぐに
こゝに空しくなりけり。

斬られし首は尊氏氏が
我つはものに興へしを
村の西なる岡のうへ
もとにぞ深く埋めたる
わがなき跡を吊らへど
ありし姿はたちまちに
言のみ耳にのこれども
なみだの淵にうきしつみ
やがてひがしの天あかく
なくとるくの聞ゆるに

なさけによりて生のある
備前の國の藤井てふ
汝が訪ふ日をまつが根の
いかにかしたに越かれ
いふかど見れば怪しやな
烟のごとく消えうせぬ。
目にもみる影ぞなかりける
たゞ明けゆくをまつばかり
ぬぐらはなるもる鳥の
うち驚きて起き見れば

これぞ正しく夢なりし
秋の草葉のつゆのたま
夢は眞實かいつはりか
尋ねどふこそ本意なれど
ひもまたよるも休なく
さるべはさかしまらま月
やがて藤井のさとにつき
鳥はねくらを人はまた
村をばなれて西のかた
もしやとふもふ心から

あはれ袖のみしぼりつゝ
いとし敷こそまさりけれ。
さもあらばあれかにかくに
思ひたちにし旅ごころも
足にまかせてゆく路の
ゆきがふ人に教へられ
あなた此方を眺むれば
いづちを指して歸る見ゆ。
小高き岡ぞ見えにける
疲れし足をふみしめて

がなたをさして行く程に
 松生ひびけり去る夜の
 さては眞やこゝよとて
 土の底より出にけれ
 こはわが夫の御首級が
 そむいかなれば斯ばかり
 恨みなげきつ泣き沈む
 ぢりの汚穢を洗ふらし
 つゝみて笑に納りつゝ
 立ち退くさきは雲水の
 * * * * *

嬉しかりけりひともの
 夢に少しも違はねば
 松が根ふかく掘り見れば
 おはれ一個の鬮體こそ
 おな懐かしと取りあげて
 變り果てしかあさまじと
 涙の雨やふりそよぎ
 ちがで扇をとりのたし
 松の葉風にあくられて
 ゆくへ定めぬ旅のそら
 * * * * *

こゝは攝津のみなと川
 庵をむすびやさしくも
 老はし息ひて茶をゆせよ
 さいらゆきかふ旅びとを
 思へばむかし亡き夫の
 よしある跡をたづねんと
 頃はずつきの末つかた
 使事を播磨まら旗の
 旅のつがれを休めんと
 まばじとこゝに立寄れば

道のがたへに幽なる
 過ぎ行く人を呼びとめ
 疲勞をやすめ給へなど
 ねざらふ尼ぞ住みにける
 菩提のためとくにの
 旅路にいでし藤子なり
 岩崎刑部高直連は
 城にはたしてかへるさに
 駒をつなぐやまは垣の
 藤子は茶の湯すゝめつゝ

土もどけなんのつき日に
何處にわたらせ給ふやと
安きに居りて危きを
今さいはひにかりこもの
四方の山がせ長閑にて
ならさぬ御代となればこそ
夢かどばかり思ひなし
あつたいたく惱めなど
従者のひとり語りしは
こゝに戦争ありしとき

さこそ苦しうおはすらめ
言葉まづかに問ひかけぬ。
忘るゝことば人のつね
亂れし時にひきかへて
吹く音静かにならの葉の
昔のつらさくるしさを
いふかひもなき此ごろの
かたりて顔の汗ぬぐふ。
思へば八年のむかしなり
身もどけぬべき暑氣をも

君はいとほで雲のこと
まばやく名譽とり給ひ
立て給ひしは月も日も
並み居るものはを聞て
汝がいふことぞ賊なる
味方の軍勢呐喊をあげ
人と馬とのきらひなく
其いきほひに恐れつと
さすがに猛き正成も
新田義貞義助も

群る敵に攻めいりて
あはれいみじき勳功を
今日にあたるぞ奇しきと
驚く外はなにかかりけり。
思ひまはせば今日なりき
うしほの如く押寄せて
槩にあたるを斬仆す
敵ははかなく敗られて
つひにむなしく討死し
力かなはで逃げ落ちぬ。

勝ほこりたるいきほひに
秋の木の葉のちりぐに
命をさらば惜まらず
死せし武夫もさばかりき
此時ばかりいさましき
闘る刑部が顔いろに
夫の討死せられしも
心みそかにうたがへば
あしやそのひの合戦に
筑紫のものはなかりしや
こいらわりのしが其うち

敵はいかでかくなふべき
落ち行くものも多かりき
ひとりといまり戦ひて
思へばげにも心地はや
勝鬨あげしことなしと
ほとりの影を見えにける。
或は此日にあらずやと
藤子はやをら進みより
うたれし敵の武士に
いかたど尋ねとひければ
菊池七郎武吉と

なのりし人ぞすぐれたる
この武吉ぞながく
その勇しきいきほひに
やくづれてし見えけるを
我は岩崎刑部高連と
いでや細首まゐらせん
うけの流しつ切り結ぶ

たけをなりしと答へらる。
猛き大丈夫なりしかば
味方の兵士怯みつゝ
こゝぞわが身の名譽なる
名のりてひとり進み出で
うけ給へんと立ち向ひ
つるぎに花ぞ咲きにける。

さすがに猛き武吉よ
疲れ果てたる後なれば
落ちしはづみに端なくも

太刀打捨てゝ組つくや
馬の上よりもろとも
膝の下にぞ引きしかれ

月の影

(吉野丸)

いとくさびしき山里の
聲に悲しき身の果を
散るやもみぢの色あせて
せめうたれしか鬼をだに
余思ふさふこの狭き
母の逝きにしその前夜
めぐみの露をうけしゆま

月に友をやまつ虫の
嘆ちつ志ぼる衣手に
かくもやつるゝまでにとそ
歎むくほどの繼母に。
胸はやぶるゝばかりなり
教へ給ひし言の葉の
つらきうきめを忍びつゝ

なさけまら涙打まゝの

母に事へて耐へ來ぬ。

ありし昔にはうへの
「われはこの世を去らん日に
きたらんはんによくつかつ
たどへ繼母なりといへ

残し給ひしことのはに
汝はまた母をもちぬらし
子たる道だに盡しなば
汝を苦しむるとあらじ、

子の添ふ母を娶りなば
汝をばこのよになきものと
家の財寶を譲りとり
心の中にもちやせん

汝が身の爲めにあしからん
なしたる後にかれの手に
まゝに樂しむくはだてを
親のまよひも子のゆゑに

母上つねに父きみに
わが子ならぬを苦しむる
おはれ此世をわれさらば
ゆめを娶らせ給ひそと

母のまことの言のはと
母のいさめとねぎ言に
ひとをめでらせ給ひけり
打ちもる母の彼によにて
骨をも身をもさくばかり
なさけあら涙うちよする

九十八
むかしがたりにまゝ母の
ためしも今にありと聞く
子のそへるをば家のため
願ふも我を思ふより。

今こそ思ひ知られたれ
そむきて父は子のそへる
草葉のかけにわが身をぞ
いかにくやしとなげくらん。

寒さきびしき冬の夜に
磯邊へゆきぞ海の水

汲みて來れといひつくる
單衣ひとつに笠ひとつ

まことの母のあるならば
かゝるうきめを見ぬものを
家に残るはまゝはゝと
うたれたゝかれ踏るゝも

一里の道を駆けゆきて
くみて歸れる道すがら
かゝみて器物うち落し
わがかなしさはいかならん

母のこゝろば鬼なれや
出て行く我を見て笑ふ。

さなくも父のましまさば
母はゆきけり父まさず
小君とわれと只みたり
このよにうすきなにしかも。

手桶に水を濱邊より
夜さむの風にわが指の
中なる水を滴しなば
又もきびしき賣うけん。

汲みかへりぬと我言に
くみこし水をなかつし
かゝるわづかの海水を
云うて甲斐なき奴かなと

尙もつらきめ見せなんと
肉もやぶれよ骨も亦
絶えよとばかりつきたく
阿達が原のくろ塚に
小君に家をとらせんと

いかり顔にて繼母は
聲はりあげてこの犬め
たれ汲み來よといひけるぞ
うつはふりあげこゝらうつ。

火箸さかてに顔かじら
折れてくだけて玉の緒も
かほに怒りはみちのくの
こもりし鬼はこのひとか。
思ふ心のひとすぢに

罪なき我を賣るとも
されど男子に生れつゝ
一きは苦しさまさりけれ

われは御身の産み給ふ
うつもころすもまゝにせよ
まことの母にあらざとも
神やとがめん天地も

をさなき時の心こそ
異なる母をもちぬとも
小君は母のこゝろぬを

身のくるしみは忍ぶべし
犬といはれし心こそ
火攻水せり受くるより。

まことの子にしあらざれば
されど親子の道あれば
殺さば罪や輕からじ
またなき母もゆるすまじ。

神よりうけし眞實なれ
我を兄とし事へつる
知るやまらさやまら菊の

花の色香をかきみだし

母のもすそに縫りつく。

打たるゝ我を助けんと
かたく母をばとらへつゝ
母よ勘忍してたべど
海棠の花の志をるゝに

弱きかひなのかひなくも
やよ兄上よにげたまへ
涙はらゝはるさめに
似たりや小君のかほばせは。

母のこゝろの梓ゆみ
ひかれて弦や断ちにけん
殺すも足らぬにくき奴
今宵はまげて恕すべし

泣きてとらむる己が子に
怒れる色をやゝゆるめ
されど小君のなさけゆを
母のめぐみと思ひしれ。

打たれたゝかれ責めらるゝ

身のくるしみを忍びつゝ

長き月日も明日香川

流れて行へまらぬ火の

筑紫の國へ去年の春

旅立ち給ひし父上を

指折りふせてまちしかと

歸りこん日や願みなき。

劔の山にのぼるども
父を尋ねて今いちど
あさへん方もあら涙の
心つなげる岸邊より

針の林をこゆるども
逢はんと思ふまごゝろの
よするまにゝ捨小舟
離れてまらぬ旅をなす。

こゝは何處の山里か
知らで迷ひて名もまれば

悲しさ胸にみちまるべ
山のもなかの荒村に

來たれど秋風なさけなく
すだく虫さへ悲しげに

澄み行く月よ心あらば
やさしき御影をうつせかし
我は山路にふみ迷ひ
また逢ふよしのあらざれば

野くれ山くれ里くれて
日もまたよるもいくたびか
うらみかさなるうつせみの

人はさらなりくさむらに
なきて我をばなぐさめじ。

鏡となりてちううへの
さなくばいかでらひつてよ
行くも歸るも別れては
彼の世に母と待ねべし。

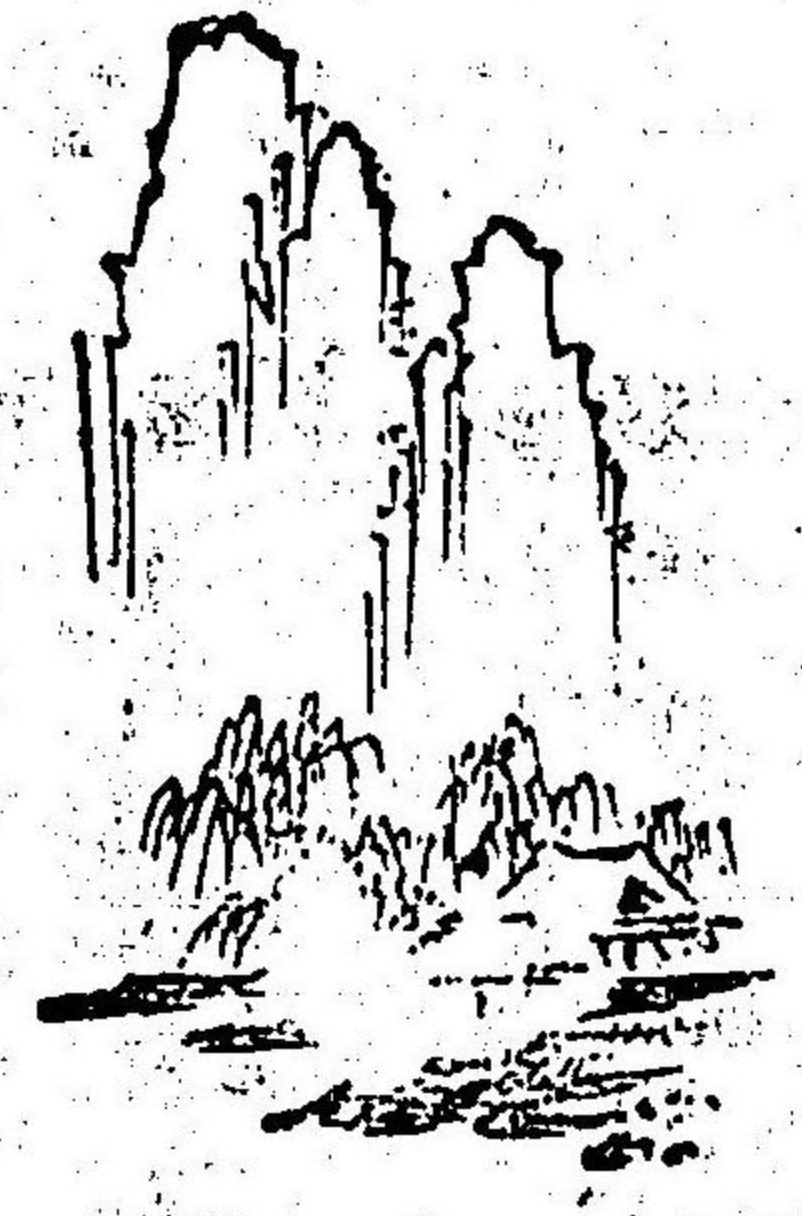
露をかたしく草枕
泪にくれし吉野丸
世にある望つきゆみの

やま路をふかく分け行けば

岸のいはほの松が枝に
はちすばのへに母上よ
此世の離別ゆるしてと
身を跳らして飛び入れば

彼所にひろき沼見えぬ。

衣の袖をひきかけつ
われを待ちたべ父君よ
涙ながらに手を合せ
波にくたくる月の影。



雲かすみ

(織機姫)

榮華の夢のさめさらば
とは思へどもうつせみの
露の乾ぬ間の牽牛花は
やまと心にたぐふべき
明日はやがてぞ散そむる
榮枯盛衰は世のなかの
とよさか登る朝日子の

秋の夜もなほ長からじ
世ぞなか／＼にさだめなき
云はずともわれ志き島の
櫻ばなさへ今朝咲かば
ならひなるこそ悲しけれ。
自然なるさだめかや
やがてまつむや西のうみ

筑紫のくたの探題と
威風四隣にふるはせつ
ときめきけるもまばしにて

なりし北條ひでときも
靡かぬ草のあらぬまで
覺むればあはれ春のゆめ。

ころは元弘三とせなり
木々は青葉の衣がへ
更けゆく空のくもまより
便宜よしやとくりいだす
旗のかげにて算ふれば
これこそ少貳もほともの
旗のまゐりに知られけり

野山も里も花くれて
みどり増すなる夏の夜の
現はれいづる月かげを
其つはものは大小の
五千あまりと思はれぬ。
軍勢なれとは夜目なから
雪の下なるくれたけの

やがてはもとにはぬかへる
三とせがほども英時の
従がひしかと今こそは

俱に夜な／＼寄り集ひ
どはうゆだにも北條の
老いぐわの花もひと／＼きの
かゝる峯よりのぼりゆく
舞へや歌へや飲めやとぞ

長きとし月志のひ來し
猛きにはやるつはものそ

折のいかでかなかるべき
こゝろの儘になすまゝに
頭もたぐる時なれや。

謀計をぞめぐらせる
方にて思ひはからぬば
夢ならんとは志ら雲の
望のつき見の酒宴とて
騒き居るこそうたてけれ。

時價晴らすは今宵ぞと
いさめ膝しつ北條の

城へみそかに進み寄り
どつとわけたる関のこそ
其すさまじきもの音は

おもひがけなく襲はれて
城の中こそさわぎしか
手對ふべきのちからなく
跡は野となれ山となれ
みな英時ともろともに

英時のつまぢりはたも
すでに斯くよと見えし時

程よきころをはからひて
つれて打ちだす陣太鼓
山をうごかす計りなり。

上へ下へと北條の
さりとして不意の事なれば
攻め入るまゝに任せつゝ
生耻のみは晒すなど
腹かききりて失せにけり。

死出の旅路をいそがんど
はしなく敵のものゝふに

持てる刃をうばはれつ
つひに果つべき機会なくて
館につらきつき日をば

思へばかなし夫はうせ
戦争に滅び給へれば
たのむの雁のつれもなく
秋来てよるの長きさへ
いにしへ人の詠めけん
かゝればなにか楽しかる
愛をなくさむすべなくて

われのみ獨り生捕られ
あづけられたる足利の
送るべき身となりけり。

父守時も鎌くら
今はいつくに何びとを
霜夜の月をあかしかね
わが身ひとりのためかぞ
歌のこゝろもまのばれぬ。
花のあしたも月の夜も
過ぎ來し方のなか／＼に

思ひやらるゝばかりにて
心づくしのいにしへを
くもらぬ空に袖をのみ

空蟬の世にかぎりある
何のためともなき身とは
あづけ置かるゝ足利の
くもりがちなる日のもとに
こゝらの年をまのぶ草

かゝりし程に足かゝは
世はまたつひにかり蒺の

はかなき筆のすさびにも
まのぶ歌のみかゝれつゝ
なみだの雨に志ほりけり。

命をさすがながらへて
思はざるにはあらねども
伯母のなごけにほだされて
うき春秋をちくりつゝ
まのぶるほどにつみてけり。

新田と事を搦へれば
みだるゝ時となりけり

あはれわが身のはかなさよ
良人に捨てられ父にまた
わが寄る家にかゝること

これも宿世の果報かや
別るうへにはしなくも
おこりてはそも如何にせん。

城おとされしあかつきに
命をさてもながらへて
云ふとも甲斐はあらし世を
翠の黒髪根もとより
姿となりて亡き人の
かくこゝろねを定めつゝ
紛れ出るや足利の

夫にまたがひ死ぬるべき
今さらの如なげくとも
唯ゆめとのみ思ひなし
ふつと切り捨て墨染の
跡をいでくどぶらはん。
あやめもわかぬ闇の夜に
館をよそに旅まぐら

むなしき草のふしとにぞ
添ふかひもなき面影に
ながれくゝて何地とも

獨りぬるよの夢寒く
おもはぬ涙まばくも
さだめぬ方に落ち行きぬ。

志ばしが程にあるはなく
あはれ何時までながらへん
むかしの事のみまのばれて
長きとしつき経ちし頃
博多にかへり我すみし

なきは數そふ世の中に
とは思へどもまかすがに
その後またも織機は
めぐりくゝてふる郷の
城のあとをぞとひにける。

廓は壊れ壊もまた
榮えし時の跡絶えて

草に埋もれ水もなく
見る影もなくなりしかど

失明鳥

萩の上風音さえて
薄き衣を身にまどひ
橋うちわたる童子あり
まに／＼ならぬ目なし鳥
たつきに道を求めつゝ
足うちほこぶ其様は
ながれに沿うてたどり行く

空ぞすみ行く秋の暮
破れたる笠をいたゞきて
心ばかりは急げども
たゞ一もとの杖竹を
牛より遅きあゆみもて
あはれと見るもをろかなり。

その危さはいかならん

身にまむ秋の夕風に
蟬の單衣の薄さるも
日も山の端に入りあひの
かひなき杖に縋りつゝ
其父母は若しあらば

空には星もあらはれぬ
されどかなしやうしひ子は
なほ其あたりさまよひぬ
身を刺すばかり吹くほどに
ふみゆく足をとゞりつゝ
目は見えぬとも幾たびか

耳のはたらき敏ければ
人の足音聞けるなり
待ちにしかひは有そ海
こゝ過ぎ給ふらん方よ
せめてはまばし手をとりて
願ひまうすと手を合せ

このさまを見れば哀よと
さけべる聲に驚きて
云ひつゝ側近寄るは
起えぬと見ゆる女なり

いとつらさやまららん
寒さや骨にとほららん
鐘に暮るゝを告げられて
家路をさしてかへらん
かへり遅きをまぢねらん。

往來の人もやゝたえぬ
虫のあゆみの遅ければ
くれゆくまゝに河風は
寒さに今は耐へかねて
まばし涙にむせびけり
後ふり向くはなにゆゑぞ。

こなたをさして進みくる
いかで助を乞はばやと
喜び如何に深かりし
いたく寒さになやむ子を
道をいそがせつれてたべ
聲ふるはせて泣きめたり。

思はぬ人はなかるらん
何をかなせるいかにぞと
三十の坂を四ばかり
かく寒き夜にいかなれば

汝のみひとりさまよつる
問ふとこたへは出る來ず

たゞ助けてと云ふまゝに
よしわが庵はこのあたり
心をつよくもちぬかし
童子の細き手をとれば
今は是れよりすべなしと
時しもあれやいさよひの

女ながらもかくまでに
顔さへ知らぬよその子を

其ゆゑあらん睡れよと
ふるふ木の葉の唇を。

またも問ふべきよしなくて
近きところにあるからは
まばしむるをこらへよと
氷の如く冷えたるに
背負ひて路を急ぎ行く
月は山よりさし出てぬ。

情あるものされならむ
せなけりひつゝ歸り行く

家路を月に照されて
柴の折戸をおし入りて
ほの影くらき燈火の
かき集めける松の葉や
咬められてやうやくに
幼き顔によろこびの
此世にかゝるぢんなさけ
めはれこゝえて死ぬべきを
つねになげきにくれ竹の
恋ふこゝちはあるまじと

やがて門へにつきぬれば
鎖し置きたる戸をひらき
もとに童をすゑ置きて
枯れ木の枝を燃しけり。
寒さは身をやはなれけん
波を漕いでささしくも
たまはる方はよもあらじ
助けくれたる御恩をば
よはらかばかりがはるども
青葉さだめに云ひ出てぬ。

年^ト齡^ニい^クつと尋ねられ
天かきくもりいかつちの
光ぞすとき小夜中に
生れながらに日のかみを
母上つねに語りけり
三とせを今は送りけり
此寒き夜にいかなれば
くおしく語りきかせよと
父のこよにありしとき
秋は月にちぎりつゝ
つくし給ひしにしへを

巳^ノとし五月の末ッ方
聲すさまじくいなづまの
汝を産みけるゆゑなれや
拜み得ざるぞ悲しきと
かぐあぢ氣なく十あまり
幸なきものと思し召せ。
汝のみひとりさまよへる
問はれで童答へらく
家富みさかえ春は花
心のまゝにたのしみを
負しき今日にくらぶ

志のぶ涙にくれ給ふ
ふち瀬定めぬ明日香川
入とせのむかし父上は
彌生の花ともるともに
家に財寶を遺せども
入るもの絶えてあらざれば
満れば欠くる月の影

母のなげきは深からし。
水のあはれの命かな
風邪のこゝちたふし玉ひ
つひに果敢なく散りけり
出るものゝみ多くして
日毎につらくなりつるも
晴るればくれる天の情。

恨みかなしみ歎けども
ためしなければ母上は
「心のこるは此子なり

逝きにし人の生きかへる
あきらめたまひ其のちは
生れてめしひなるうへに

また兄弟の一人だけに
力の及ぶかぎりには
遺し置きにし言の葉を

なきこそあはれ幸なけれ
學びの道につかせよ」と
堅く守らせ給ひけり。

目にこそ物は見えねども
やよの中の道理を
されど悲しや日に月に
三たびの食もまゝならず
肌に着くるは單衣なり
只母うへのきのふより
道行く人にをしへられ

教を受けしころには
悟り得たるぞありがたき
貧しきさまになりゆきて
秋風さむくなりぬれど
これらは尙も忍ぶべし
やまひの床にいぬる外。
母のやまひをいやすべき

藥を得たるうれしさに
寒氣にいたく襲はれて
厚きなさけを賜はりぬ
歸り遅きをまちわびて
身も暖かに成りぬれば

いさみてかへるみちすがら
くるしみたるに嬉しくも
あはれ家には母ひとり
胸をなやましおはすらむ
いでやいとまを願はん。

あはれかくまで真心を
汝より外になかるべし
神もめぐみをたれなんと
いたく心なくなるしめそ
病も癒えて喜悅の
愁にまづむめしひ子を

つくして親につかふるは
正しき道を行なはし
世の人言にきくからは
やがて近きに汝か母の
日を送るべき時こんど
覺束なくもなぐさめぬ。

こゝろばかりの贈りもの
金の財布と着物とを
又もなさげを深見ぐさ
からくれなゐに染めのこす
やがてこの家を立いで、
うれしき道を急ぎ行く

十
乏しけれども納めよと
いだしてこれをとらすれば
消えて跡なき露ならで
涙に袖をまぼりけり
杖を力とたのみつゝ
童に月はともなひぬ。



乞
別

おがいでし子よらまこそは
なれにのこさん歌もなし
空には雲雀もうたひ得じ
ひとつのをしへ授くれは

わかれ去ぬべき日となれど
かく悲しげに晴れやらぬ
されどわかるゝその前に
つとめて常にまもれかし。

よき人となれいたづらに
無益に終日つひやさで
さらばこの世に在るうちの

才あるものな羨みそ
つとめて貴き業をなせ
汝が命をも亡き後の

あゝの世のながき行末をも

うれしき歌となしぬべし。

十二



捨小舟

花は跡なき夏やまの
そよぶく風にさそはれて
なき身の家にぞありけるか

緑涼しき木々の間を
いつれはこゝはいとし子の
こゝに來しこそうれしけれ。

袖にひづるは五月雨か
まづむなげきにむらきもの
今はむかしのたのしみを

みかさぞまさるなみだ川
心くだくるばかりなり
またも得じとぞ覺ゆれば。

十三

正しかりけるこゝろだに
悲しむねにみちのくの
あかしき夢を見る夜には

汝に捨られしそのこゝろは
志のぶもじずりみだれつゝ
さらに涙の雨ぞふる。

あなさびしくも吾ひとり
苦の下なる汝がすがた
靈はのこりてさかゆらん

汝が身の墓に立てるかな
消ゆるといへどあめつちに
千代萬世の末ながく。

閃めく光はいなづまか
我もむかしはものゝふの
つるぎぬきつれ出でしとき

とゞろくあどはいかつちか
かずにまじりてたゝかひに
心の駒こそいさみしか。

されどひとりのいとし子の
つちの志とねにいねしより
やみ夜に光うしなひて

我を見すてつあらかねの
こゝろはいまぞ鳥羽玉の
たつきも志らぬ身とぞなる。

樂しきわざをともにせし
我いとし子のなきたまよ
我も露けきこの中に

汝があくつきはこゝなりや
心きよらにすめるとき
入らむとこそは願ひつれ。

胸にみちたるかなしみも
汝に語りて悲しさも
心はなにかうき舟の

また樂みもひたぶるに
たのしさもみなともにせば
よるべうしなふことあらん。

君が墓場に

十六

われは今きみが墓場に
水をくみ袖にうつして
うけよかしたふとき君よ
かへらぬはことわりながら
あだながら落るなみだは
願はくは其音にさめて

立田川からくれなるの
心ばかりをたむけまつらむ。
彼の世にぞ逝きける人の
きみのみはあきらめつかず。
流津瀬の響をはなつ
聞けよかしまのぶ心を。

このよにてたゞ君のみを
つなぎこし光はいまや

願みつゝするの希望を
消え失せぬ鳥羽玉の夜に。

悲じかも人の生命は
あはれわれも亦この愛世に
どいまるが何處にきみは、
いにし日にわが身の上を

はかなしと思ひしれども、
あらむより寧ろ死をねがふ。
恐るべしうき世の風は
かざりける花をちらしぬ。

今日見ずば明日は雪どぞ
遅くともよしや最期の

散るらむとわれに告げなば
容姿をば拜みしものを。

十七

定めなき世にはあれども
逝きしとは思はざりけり

我を捨て君のみひとり
夢にだに知らざりしなり。

あはれ土よ憐れみたまへ
子をおもふ母のかひなの

あたゝかき汝がふどころに
ごとくよく抱き守れよ。

なさけある土のかひなに
天うらゝかに月ぞかゝやく

いだかれて安く眠れよ
亡き靈よ宿所は廣し。



たもかげ

(舊稿)

「酌酒與斐迪」のころを(玉穂)

いづ酒くまん君飲みて
ひとの情のつねなきは

胸のくもりをはらへかし
よせてはかへす波瀾のごと。

長きとし月交はれる
さきに進官みしとも亦

友さへいまは敵となり
また目にわれを笑ふなり。

草葉のみどり色よきは

雨とつゆとのめぐみかや

花は咲かんとおもへども

さむき春かぜ恨めしや。

やめよ危ふし頼みなき
たかき枕にうきよ捨て

うきぐもごとき世の事を、
やすく暮らんことぞ勝れる。

「野暮」のころを(玉鏡)

ひがしの岡に夕まぐれ
やがていづこのあてもなく

われは佇みのぞみけり
あなたこなたを道ひぬ。

野山の樹々はみな秋の
西の峯にはあかねさす

色をちびてぞたちにつける
夕日の影ぞかくれける。

牧場をまもる人はいま
山にかりせるひともまた

野かひの牛をつれかへり
馬に獲鳥とらをのせかへる。

あひかへり見て顔知らず
高く一ふしうたふ身は

誰とかたらむよしもなく
伯夷のうたもなづかしや。

「秋夜」のころを(葦應物)

あはれぞまさる秋の夜に
すいしき空にたいひとり

むかし志のびて君を戀ひ
をちこちさまよひ謠ひけり。

山はむなしく松の子も
親しき君もぬむらずて

今は落ちはてものさびし
過ぎ來し方や思ふらむ。

「絶句江碧」のころを(杜甫)

海原青く飛ぶ鳥は

ひとしほ白ざまざるなり

山はみどりに咲く花は

ひとしほくれなるまざるなり。

かゝるのどけき春をいま

みすくすぐるくちをしさ

いづれの日にかふるさどに

またながむるを得べきかは。

「春曉」のころを(孟浩然)

やたけ心やはるの夢

曉知らで眠りしが

群がる鳥のをちこちに

さへつる聲にめさめけり。

庭の木の葉をさわがせて
あな情なやちほかたは

前夜よりまきりに雨と風
さける花びら散りぬらむ。

「浪」(テリシユ)

何方へ濁る浪よきみ

何方へかゝるいそぎもて、

賊奴に君はさもにたり。

我は生命のなみぞかし

河岸の泥にぞ汚されし。

細き小河にきそふより

廣さまれざる海原に

いそぎてわれは流るなり

時の岸より穢れたる

我身の垢をあらふため。

「村童と小河」(アリシヤン)

彼方に見ゆるいとたかき
小河は村をながるなり
洗はんとてか歩み來て

山より下るひとすぢの
村童はやがてかれの手を
小河にむかひ云へるやう、

何處の山より君來しか

淡く涼しきわが小河。

彼處にたかき山を見よ
残れる雪にゆきつもり
涼しき水に解くるなる

寒さきびしき冬來るれば
暑さきびしき夏くれば
それよりわれは流るなり。

何方の川へ君往くか

清く涼しきわが小河。

彼方に流るゝ川を見よ
影をまじへて咲きみだる

匂ひ香ばしきすみれ草
それにおのれは流るなり。

何處の花園に君行くか

淡く涼しきわが小河。

彼處の谷間の花園を見よ
戀慕の歌をぞうたふなる

花にうぐひす絶えまなく
そこにおのれは流るなり。

何處の清泉に君ゆくか

淡く涼しきわが小河。

彼方に澄める潔泉見よ

酌まんときたる君をこひ

岸邊にたてるうつくしき
駭るたのしみ忘れぬ

少女にあうてその頬を
そこにおのれは流るなり。

「羽林姫」(クヤメル)

「やよ渡守たゆたふな
黄金をあまたとらすれば」
山國族の酋長なりき。

われらがために舟を漕げ
言葉するどく叫べるは

「濁り荒れたるこの水の
渡るをねがふ人やたれ」
これはウリジのひめぎみよ、

ロックガイルを横ぎりて
「われはウルヴァの島主にして

ウリジの君のひとくに
三日前とぞおぼえける
見出されなばたちまちに

かくれて共に逃れしは
若し此溪谷にさまよふを
わが血はいばらを穢すべし、

騎兵は今やわがあとを
やがてわれらに追いつかば
さらば優しきこの姫を

尋ねていそぎ來るなり
われをこの儘いかすまじ
慰さめくれん人は誰ぞ。

「やよわが君よわれ漕がん
とらんと願ふためならで
おがしくうたふ鳥もげに

光り輝やくこがねをば
君が愛でつる姫のため、
危ふき時は飛び去らむ

されば白浪怒るとも
われは漕ぐべしこの船を」。

怒るあら浪白むとも

いはほをうがつ雨のため
四方にくろくも塞がりて
空はやみとぞなりにける。

あらしにひらく浪のはな
共にかたらんひまをなみ

されど嵐はいやまして
いともすこくなりし時
谷間にこゝら騎る馬の

夜はやうやくに更けわたり
劍帯びたるものゝふが
蹄のひゞき聞えけり。

姫さみ高く叫びけり

「やよ渡守いそげかし

いかに雨風あるとも
父のいかりにあふばかり

天の怒怒は忍ふべし
よに耐へられぬものぞなき」。

船は荒れたる陸を去り
狂へる浪は大獅子の
進まんすべもなかりけり。

あれたる海にこぎ入りぬ
跳るがごとく船を噛み

なほも勇みてあら浪を
ひめの父さみ羽林伯
忿怒のいろも消え果てし

避けつゝ舟を漕ぎにけり
今や濱邊に驅け來り
あな悲しやと歎くのみ。

やがて嵐にくだかれん

船にいとしのわが姫は

左手をさしあげ救助こひ
抱くを父は見るゆゑに。

右手をのばしてこひ人を

さすがに父もこらへかね
かへれやかへれわが姫よ
われはゆるさん歸へり來よ。

「怒れる涙をうちこえて
汝が戀人ももろどもに

叫ぶもつひにあだなりや
岸にくだけて「助けたべ
海原遠く捨をぶね

高きあだ涙なりわたり
歸れ」の聲をさまたげつ
父のなげきぞきはみなき。

亡兄を悲しむ（ヘーヤンズ）

「歸へらせたまへ兄うへよ
夏のもろ花咲くものを

ひとり遊ぶぞつれなきや
いづこに君はたはします、

はねを光にかゝりかせ
跡追ふべくも思はじな

花に飛び舞ふてふくの
歸らせたまへ兄うへよ、

園のめぐりにともくりに
蔓に葡萄もみのれるを

植えてし花も咲きみだれ
歸らせたまへ兄うへよ。」

「おはれ童子よ汝はいかに
春日に似たる笑がほをば

よび叫ぶども無益ならん
浮世にいまは見らるまじ、

薔薇の短かき玉の緒よ
いでたゞひとり遊べかし

たのしみどもに消え失せぬ
なれが兄こそ天にあれ。」

「をしみし花や鳥を捨て
夏の日ながくさけぶとも

いつこに行かせ給へるぞ
ふたゝび歸へり來まさぬか、

小河の岸に道のべに
あはれかくぞと知りたらば

どもにさまよふ事やなき
ひときはうれしく遊びしを。」

涙 (ムーン)

月のひかりは白たへの
空はあぼろになりわたり

雪のふすまに眠りつゝ
吹きくる風も音寒き

夜半にひとりの少女子は
いたく涙にむせび居る

墓のかたへにたゞみて
そは戀ひ人のあくつきか。

滴たるなみだは熱かれど
氷の珠となしにけり
翌朝昇れるあさひ子の

なさを知らぬ冬の夜は
こほれるなみだの一たまは
光にきらめき輝やけり。

天つ乙女はくだり來て
ながめて深くあはれやと
眼にはなみだを浮ばせて
上にぞかざりかけにける。

ひかりかゝやくこの珠を
思ひや志けむつゆふくむ
いと美しきかんむりの

8/35

明治三十年五月五日印刷
明治三十年五月十五日發行



編纂者兼
發行者

三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十三番地

印刷者

島連太郎
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

發行所

東京市神田區三河町二丁目十六番地

明治書院

特約大賣捌

東京市神田區通新石町

同文館

大阪東區備後町四丁目

吉岡平助



76
40

